

たという一点にあるのである。夫がハンセン病になったというような特別なケースを除けば、女性には夫を離縁する権利は全く認められていなかったのである。どんな嫌な夫でも、第二夫人との間の親しい情交を目の前にみせつけられながらも、自分は一度も真に愛された経験を持つことがなかったような場合でも、一度結婚した以上は、彼女は生涯その夫から別れることはできなかったのである。

「神が結び合わせてくださったものを人は離してはならない」という『マルコによる福音書』一〇章九節のイエスの言葉は、このように差別され、哀しい地位に置かれていた女性への、イエスの敵とした弁護の言葉として受けとられるべきであろう。そしてこの「姦通の女性」の物語をも、私たちはつねにこのような女性の辛く哀しい社会的地位を念頭において読まなければならないのである。

(続く)



井上神父の主日の説教を聞く(一)

山根知子

一月一日「神の母聖マリアの祭日」(『ルカによる福音書』二章二六〜二二節)

一月一日は、教会暦では「神の母聖マリア」の祭日にあてられており、風の家では朝早く六時半にミサがあげられた。聖書は『ルカによる福音書』二章一六〜二二節が読まれた。天使のお告げを聞いた羊飼いたちが、飼い葉桶の乳飲み子イエスを訪ねる箇所である。年の初めにあたるこの日がどうして神の子イエスの母であるマリアの祝日にあてられているのだろうかとふと素朴な疑問が浮かんでしまうのだが、井上神父のこの日のお話は、それに答えてくれる次のようなものだった。

母親としてのマリアは、息子イエスの、馬小屋での誕生から十字架の死に至るまでの、人間の目から見れば栄光のかけらもないような生涯を見やりながら、むしろ自分が代わってやりたいと思うほどの苦しみをおそらく幾度も味わったにちがいない。しかし、マリアは神の働かれる場としてどうぞ自分をお使い下さいという姿勢を生涯もち続け、その苦し

みや悲しみを神の御手から受けとっていった。そのように、私たちのこの新たな年も、苦しいことも悲しいこともあるだろうけれども、それらを神の御手から受けとることで、どうぞ私たちのこの一年を神の働かれる場としてお使い下さいと私たちもマリアと共に神に祈ろうという、そういう思いで迎えるのがふさわしいのではないか、ということだった。

私はその話をはっとする思いで聞きながら、昨年春、井上神父の率いる聖地旅行に参加したとき訪れたナザレの受胎告知教会でのミサの説教を思い出した。それは、偶然にも「神のお告げ」の祭日にあたっており、そのお告げの場所と伝えられている洞窟に設けられた祭壇で捧げられるミサにあずかることができたのは、大変感動深いものであった。そのとき井上神父は「なれかし」のラテン語である Fiat (フィアト) という文字の刺繍が背に入った祭服を着ておられ、こんな話をされたように記憶している。フィアトとは、神の子を宿すという人間の理解をはるかに越えた神のお告げに対して、自分のごさかしい思慮分別によって判断するのではなく「仰せのごとく我になれかし」と言って全く神に委ねきつたマリアの姿勢を表す言葉であって、これは信仰における最も大切な姿勢を教えている。息子イエスが家を出てゆくときも、母親として当然ある何とも言えない感情を味わっていただろうマリアは、息子イエスのやろうとすることを完全に理解していたわけではなかっただろうが、自分の浅はかな知恵や感情を越えて、フィアトの祈りのうちに、苦難の場へと歩み出す息子イエスの後ろ姿を黙って見つめていただろう。そして、息子イエスが十字

架の上で苦しんでいるときも、マリアは代わられるものなら自分が代わってやりたいと思うほどに耐えがたい母親としての悲痛な思いを抱き、どうしてこんなことにと嘆きながらも、フィアトの祈りのうちに、十字架上の息子イエスの姿をじっと見つめていたのだろう。その苦しみも悲しみもすべてを神の働きの場として、祈りのうちに、神の御手に委ねていったこのマリアのフィアトの信仰の姿勢を、私たちも少しでも見習いたいものだ、と。

このフィアト(なれかし)の祈りに習いたいと思ひ、未熟な私も祈りのなかでこのマリアのような気持ちに近づこうと幾度か思ってきたように思う。しかし、こうして井上神父の話聞きながら、マリアがその生涯でこのフィアトの祈りをしたであろう多くのできごと、例えば、神の子を身籠もるといふ突然のお告げ、馬小屋でのイエスの誕生、息子イエスの旅立ち、十字架の道をゆく息子イエスそして十字架の上での息子イエスの死などを想い、こうした状況でのマリアの祈りをありありと想像してみると、今までの私のマリアに習おうとする祈りも、いかにまだマリアのフィアトの祈りの姿勢には遙かに遠いかがつくづく思われる。というのも私がフィアトの祈りを心で唱えているときでも、実はそこに私にとって都合のいい、自分勝手な思いがどんなに入りがちであるかということに思い至るからである。祈りのうちで、「御旨のままになりますように」とか「神様の道具として私をお使い下さい」というふうに言っているながらも、自分の心のうちを正直に見つめれば、そう祈る前から「それはきつとこういう御旨だ」とか、「こういう道具として使ってほし

い」とかいう願いが用意されていることがほとんどであるように思う。もちろん、そのような願いをもち、それを祈り求めるのも一概に否定されるべきことではないだろうが、ただ、求めたものとは違った結果になったとしても、それを素直に「御旨」として受け入れられるようなやわらかな心もちたいと私は切に願う。マリアの生涯を思えば、それは、息子イエスにこうあってほしいと母ならばだれしもが平凡に祈り求める願いはほとんどかなえられなかった母としての生涯であったにちがいない。そうでありながら、息子イエスの後ろ姿をいつも見つめながら、母としての苦しみも悲しみも期待もすべてを神の大きな悲愛のなかにお預けして、全く自らは神の働きの場となり、フィアトの祈りの姿勢をつらぬいた生涯だったのだとしみじみと感ぜられる。私たちは、どうしてもエゴイズムの曇りによって純粋なフィアト（なれかし）の祈りになりきることはむずかしいけれども、そうした至らない自分であることをも受け入れながら、少しでもマリアのフィアトの祈りに近づくことで、神の悲愛の息吹の働きの場としてこの私たちの新たな一年をお使い下さいとマリア様とともに祈ってゆきたい。

一月一三日「主の洗礼」(『マルコ』による福音書)一章七節〜一一節)

一月一三日のミサの説教は、『マルコ』による福音書』一章七節〜一一節、すなわち主の

洗礼の箇所であった。井上神父は、まず洗礼者ヨハネの当時における新しさについてこのような話をされた。洗礼者ヨハネのもとには、サドカイ派、パリサイ派の人たちもやってきたが、当時人々から差別され軽蔑され、汚れていて救われないとさえ言われていた徴税人、娼婦、らい病人といった人たちもやってきた。そして、洗礼者ヨハネはその人たちすべてに対して、悔い改め、つまりあらゆる価値のなかで神を一番大切にして生きる生き方に方向転換することを強く求め、そして悔い改めて洗礼を受けるならどんな人でも救われると説いていた。そうした差別され、軽蔑されていた人たちにも救いを説いたところに洗礼者ヨハネの当時における新しさがある、と。私はそれを聞いて、洗礼者ヨハネがまず福音書の最初に登場し、イエスもそこに一時弟子入りしたことがあるという、その理由の一端が理解できるように思われた。

そして次に、井上神父は、イエスもここに来て洗礼を受けたことについてこのように話された。イエスは自分としてはすでに神との正しい関係にあり、洗礼の必要はないのだけれども、洗礼者ヨハネのもとで洗礼を受けている人たちのなかには娼婦もいれば徴税人もいるし、らい病人もいる、そうしたいろんな悲しみを背負って生きている人に対して、イエスは、自分を上において、上から裁くとか憐れむとか救い上げるとかいうのではなくて、そういう人たちの横にいて一緒に水の中に入り、その悲しみを共に感じようと言われた。このイエスの姿こそイエスの生涯を非常によく象徴しており、水の中に一緒に入られた、こ